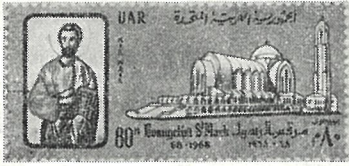


# ハッサンとボーリスの国

— その 2 —



## 村 山 盛 忠

### ヘルワンのスーク

さて、この辺でこちらの日常生活の一端を記してみたいが、紙面も限られていることなので、スーク(市場)の状況をえがき出すことによって、こちらの人々の生活や人情に触れてみたいと思う。

ぼく自身スークに出かけるのが今では好きなのだが、慣れるまでは気苦労するものである。第一、値段フダなどついていないので、相手と取引をしなければならぬ。何といっても相手はどうかして高く売りつけようとして客を待ちかまえているのだから、野菜一つ買うにも始めのうちには身の引きしまる思いであった。しかし言葉にも慣れ、相手の気心が知れて来ると、なかなか愉快になってくるのだ。

スークはまた彼らの生活の強烈なバイタリティをこの身に感ずるところでもある。どこかの町にも二、三カ所のスークがあり、近辺の農村からラスダやロバで野菜や果物、穀物を運んで来てスークを賑わしているのだ。そこに行けばほとんど食べものに関して無いものはない。青物は言うに及ばず、魚もあれば生

きたニワトリ、アヒル、ウサギ、ハトなど道ばたに並べ出してあるのだ。グワァグワァ鳴いているアヒルの足をつかまえて大声で取引している様子は実に愉快である。その取引も二、三分で終わるといふものではない。長いものになると三十分近くも話し合っているのがいるのだ。まさに語ることは彼らにとって生活の一部なのである。

もちろん牛肉などもそのままの形で店頭でブラ下っているのだが、水牛の肉の方が常食らしい。その他羊肉も好まれて売られている。少々グロテスクに感ぜられるのは羊の顔や足をずらりと並べているのにお目にかかることである。そして白い羊の脳味噌がその横に並べてあったりする。この羊の脳味噌は「モッホ」といってサンドイッチには喜んで食べたりしているが、なかなかオツな味ではないものである。こちらに来てぼくはハトの丸焼もはじめて食べたのだが、これもまた柔らかくておいしいものだ。ある時、小学校の先生宅に招かれてアヒルの肉を出されたのだが、これは余りぼくの口に合わなかった。もっともその食事中、四、五匹のアヒルの子供がガアガアいいながら自分たちのテーブルの

下で抗議していたせいもあったかも知れない。普通ほとんどの家でニワトリやアヒル、ハトなどを飼育しており、折あるごとにこれらの肉を食べているようである。

ぼくはヘルワンのスークではもう顔なじみになってしまったが、行きつけの野菜屋のオヤジは何時も独特の英語で喋ってくるのだが、そして彼は、自分の英語は英国人よりもすぐれているとホントに信じているらしいのだ。「ゲド・モルニング・サー」で挨拶は始まり、ことあるごとにお前が中国に帰る時はぜひ自分の息子を連れて帰ってほしいと頼まれるのだ。ぼくはその初期において二、三回も中国人ではなく日本人であることを訂正しておいたのだが、そんなことはこの相手にとってはどうでもよいことで、東洋人一般は中国人でいらしいのだ。

「今日のトマトは少し高いじゃないか」というと「いやこの値段はナセルが決めた値段だから変えられない」と答える。毎土曜日の朝、ラジオの「今週の野菜市場」の時間で公定価格が放送され、それによって値段を決めることになっているのだ。しかしそれもあくまで基準であって客によって高くなったり低くな

ったりするのが普通だ。「お前だから安くしとくぜ」といわれることが多くあるのだが、どうもこれは挨拶になっているようである。

この野菜屋の向の側には魚屋があり、ぼくの姿を見つけるとこのヒゲをはやしたオッサンは「ヘーイ、日本ノ」と呼ぶことになっている。ぼくの家ではこの四年間ナイル河でとれる「ボルティ」という魚を常食しているのだが、この魚屋のオッサンが何時も確保してくれるのだ。それでもこちらの胃の都合もあり、毎回この「ボルティ」という具合にもいれない。手を振ってまた来るからと通り過ぎるといかにも残念という表情でこのオッサンは肩をすくめてみせるのだ。

その隣りに座り込んでいるのがレモンと青物を売っている黒ヴェールのオバアさんであるが、なかなかユモアのあるバアさんである。ラマダンというイスラム教の断食の月があるのだが、その時このオバアさんは大声で怒鳴って売っていたものだ。「さあさあこの野菜は断食しとるもんにも、してないもんにもキク野菜じゃ。」道行く人々に笑いを催させたことはいうまでもない。

インドのカルカッタでの印象は乞食が非常

に目についたことであつたが、エジプトではほとんど見つかからない。しかし時々、普通の身なりをした黒ヴェールの婦人なり老人なりが、近寄って来て物乞いすることはある。このヘルワンのスークに行くまでの街角に一人物乞いする老人がいるのだが、始めのうちそこを通るたびにシッコクつきまとわれて困つたものであつた。「ハガー・リッター」（何かおみぐみ下さい）といいながら近づいて来てはくと一緒に歩き出すのだ。「何もないから」とことわつても百メートルほどは「ハガー・リッター」を言いながらついてくるのである。

このことをある目現地の牧師に話したら「ハガー・リッター」といったら「アッララー」と答えたらいいというのだ。「ハガー・リッター」を直訳すると「何か神様のために」ということになるが、「アッララー」は「神様に（負へ）」ということになる。

早速ぼくはこの物乞いに「アッララー」と答えたら効果てき面、それ以後いつさい後をつけてこなかった。やはりこの国の価値判断の序列は神・人間・河（ナイル）の順になっているらしい。アッラー（神）が出て来たらそこで判断停止、思考停止の状態になるのだ。

## アシース村山の仕事

さて最後にこちらの仕事について簡単に記し、筆を置きたいと思う。ぼくは四年前に日本キリスト教団から派遣されて現地のコプト福音教会の産業伝道部門で働いてきたのだが、この教会の歴史は日本のプロテスタントとほとんど同じで約百年余りの歩みを持ち、北米長老派教会によってはじめられた教会である。現在は独立教会として自立し、約二五〇の教会と二万人の会員数を陣容としている。日本の教会と著しく異なる点は彼らの信仰的地盤がすでにコプト・オソドックスであったということだ。いうなら彼らの二、三代前に属する祖父、祖母の時代はオソドックスであるのだ。オソドックスからスカウトして来た人たちの群れがこの福音教会で、その点両者の関係は余り良くないのが実情である。時々、熱烈なオソドックスの信者に出くわすことがあるが、彼らは新教の牧師を牧師として扱わない。こちらで牧師を呼ぶ時には「アシース」(牧師)とか「アボーナ」(神父)とかの敬称を用い、それがまた一つのプライドにもなっているのだが、このような熱

烈なオソドックスの信者になると新教の牧師は「ウスターズ」(……さん、原意は教授)呼ばわりしてひどく牧師の神経にさわるようだ。これらの敬称はこちらの日常生活の中では非常に重じられているので、牧師にとってカッンとくるらしい。

マハラは牧師と或る時訪問したのが筋金入りのオソドックスの信者の家で、牧師を「ウスターズ」と呼び、ぼくを「アッハ」(兄弟の意、友人間でよく用いる)と呼んでいたのはもちろんであるが、お祈りをする時、彼は東方に向って祈りをするのだ。実はぼくはこの時をはじめの経験だったのだが、別れる前にお祈りをはじめると一斉に彼らはぼくたちに背をむけ壁に向ってしまっただから、これは徹底的に新教に対するプロテストかと思っていたら、そうではなく、後から聞くところによるとオソドックスではキリストが再びこの世にやって来る時、東方から雲に乗ってやって来るので、その方向に向って祈ることだった。その時たまたま東の方向が壁の方向であり、僕たちに背をむけたかっこうになったわけだ。

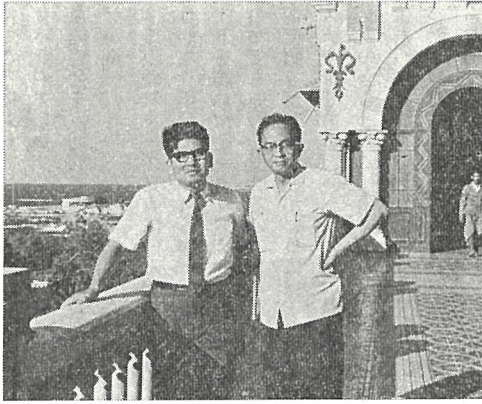
ぼくなどこの「アッハ」(兄弟)の称び名が

すきなので「アシース」でなくてよい「アッハ」で呼んでくれというのだが、相手は、一体、それはなぜかと真面目に問い返して来ることがたびたびなので、結局、めんどくさくなって「アシース」に落着いてしまうのだ。

仕事の関係でぼくは労働者たちと接触する機会を多く持ち、ほとんどのエジプトの産業地帯といわれる町や村を歩きまわったが、それらがキリスト者労働者に限られていたこととはぼくたちの仕事の限界性を感じさせるのだった。

最初の一年半はマハラというそこには中近東一大きい繊維工場がある労働者の町に住んだのだが、今から二年前のメーデーにはナセル大統領もこのマハラにやって来て労働者と共に祭りを祝ったりなどしていた。金曜日になるといちおう彼らの休日であるので、よく現地の牧師と家庭訪問をしたものだ。今このコハラ教会では毎火曜日労働者の家庭で集合がもたれるようになっていた。その中心メンバーの一人であるバディヤという青年はすでに家庭をもった若者なのだが、自分の部屋の一室に図書室をもっていて労働者のための文書伝道に専念して牧師を助けている。もち





左が村山氏 右は竹中教授

ろん、文書伝道といってもイスラム教徒に接触する機会はほとんどないといつてよい。教会に行かないオーソドックスの信者たちがその対象になっているようだ。一昨年、労働者のための夏の研修会を開いたが、この時このバディア青年がアレクサンドリアの海岸をばくと散歩しながら「キリストの再臨は何時だろうか」尋ねたのが妙に印象に残っている。それはなんだかもの悲しい姿として、むしろ彼の生活の苦悩の表現としてほくには響いた

のだった。

### 産業伝道の組織づくり

労働者伝道といつても、労働者意識をもった人々が集い会い、共に自分たちの問題を語り合うところまでは来ていないし、またそれは内的・外的理由で無理なことではないかと思う。内的理由としてあげられるのは前述したように彼らは非常に宗教的生活を好む人間であるということだ。信仰の話題でも教理問答の内容が多いし、それを一時間でも二時間でもかけて話し合うのだ。「永遠の生命とは何か」について論じ合うといった具合だ。ほくの知っている銀行マンは密室の祈り場を自宅にもうけるために造築したし、今年の四月、聖母マリアがカイロのザイトン教会に毎夜のごとく顕現するという事件はこちらの有力新聞の「アル・アハラム」のトップ記事に写真入りで掲載される次第だ。ヘルワンの女子高校生が目に見えおびて「私はマリア様を見た」とほくにいったものだ。そしてそれはどんな姿をしていたと尋ねると「聖面そのままでした」と。非常に直接的に信仰を受け入れるということは彼らの精神構造の特

徴といえるかも知れない。

外的理由としてあげられることは、この国の政治形態が「アラブ社会主義」の体制を取っているということである。

急速な国造りを目ざしているこの国にとって、強力な指導力のもとで統制をとりつつ歩まねばならぬのは当然なのだが、指導層と市民層との国造りに参加する意識において深い淵を覚えるのも事実である。それはそれとして、このような統制下においては集会の自由は与えられていないし、教会の集いは会堂内に限られてしまう。もちろんこれはキリスト教会だからというのではなく、どんな集会でも勝手に開くことはできないのだ。

アレクサンドリアの近くにカフル・ダワルという、これも繊維工場の町があるが、その牧師が定期的な家庭集会を工場内に建てられている労働者のアパートで持っていたら、それが関係者から注意されて、宗教活動であるならば、教会堂でするようにとの忠告をうけたということであった。もっともこのカフル・ダワルの繊維工場ではじめて共産党（非合法）の指導によるストライキが起ったことがあるので、特にこのようなグループ集会有

持つことに對しては厳しいのかも知れない。マハラヤアレクサンドリアの教会では、事実、家庭集會を定期的に開いている教会があるのだから。

このカフル・ダワルに任んでいるA兄はもうかなり年輩と思われるが、彼の薄暗いアパートを訪ねた時「クリスチャンはなぜこういつまでも迫害を受けるのでしょう」と重い表情で語りだした。彼がいうには、自分がクリスチャンであるというだけで、職場ではいつも人のきらわれる仕事をやらされ、それをこばもうなら、首になつてしまふということだつた。事實は果してどうなのかぼくにはわからない。現場における彼の能力、人間關係など、客觀的に判断する必要があるうし、キリスト者が少数者であることのヒガミから來ているのかも知れない。しかし、これと同じような発言を他にも聞くことは確かである。一応このような現実のあることを参考までに記しておくにとどめたい。

これは前述した「コプト教会が他宗教と對話を求める時代に入った」というほくの表現と矛盾していることかも知れない。しかし巨視的な観点からその歴史の流れを把握しつつ

なおかつ各分野で起つてゐる小さな事實にも直視しておく必要があると思うのだ。

この四年間、ほくにたくされた仕事の課題は産業伝道の組織づくりということであり、そのオルグ活動を通して現代社会における教会について共に考えたいというのがぼくの念願であつた。そしてその姿勢として、この国の新しい「国造り」に参加するという積極的な意識を持つことが基本線であると信じてやうて來たのだが、それが果してどこまでなされたか今ふり返つてみるとおぼつかない状態だ。それでもこの八月からぼくの後継者として現地の青年牧師がフルタイムで働くことになつてゐる。彼をささえる經濟的な問題、また教会の保守的の性格から來る批判など前途は実に厳しいものがあるのだが、今はただ現地の委員会を中心にして自分たちの独自の歩みを見出しつつ歩んでほしいと願つてゐるのだ。

「アラブ社会主義」という大きな課題を担つて歩んでいるこの国の核心問題が教会の心臓にまでつたわつて來た時、新しい鼓動が開始するように思えてならないのだ。

(昭34大神虎卒・牧師)

## 史料彙報 第二集

第二公会録事 (明治9年12月3日~17年6月28日) .....	3
同志社英学校生徒名 (1884年4月現在) .....	17
同志社視察之記—京都府学務課より外務省への報告— (明治12年5月28日~16年6月27日) .....	20
京都同志社病院規則・京都看病婦学校規則 .....	41
神学科目に付願書—鎌田助他3名連記— (明治15年3月31日) .....	56
Kumamoto—An Episode in Japan's Break from Feudalism. by Capt. L. L. Janes 57	

発行・同志社史史料編集所

頒価 1000円・B5判 110ページ